

## 〔 一般教養科 〕

### 〔 区 分 A 〕

#### 佐伯 徳哉

##### 鎌倉時代伊予国支配の構図と地域

佐伯徳哉\*

\*新居浜工業高等専門学校一般教養科

伊豫史談、395号、pp13-23、(2019.10)

鎌倉時代の権門体制国家による、瀬戸内側と宇和海側の地域からなる伊予国の支配構造を明らかにした。従来、伊予の平安末・鎌倉時代史の研究は武家中心史観が強かった。しかし、ここでは、筆者が出雲国や山陰地域で鍛えてきた中世国家による地域支配の方法論を用いて、鎌倉時代の伊予国支配の構造を幕府支配の浸透と西園寺家による知行国支配を軸に、公家・武家・寺社勢力から構成される権門体制支配からトータルにとらえる視角を提起した。

#### 佐渡 一邦

##### Past Tense as a Modality Marker in English

佐渡一邦\*

\*新居浜工業高等専門学校一般教養科

甲南英文学、No. 34、pp45-64、(2019.7)

仮定法を体系機能文法の観点から考察した。Ifなどの接続詞で始まる条件節は閉鎖的、開放的、仮定的、反事実的の4種類があり、仮定的用法では実現の可能性が低い事柄が、反事実的用法では事実と反する内容が述べられる。この2つの用法に共通することは、内容が現在であるにも関わらず、過去形が用いられていることである。これらの用法は、発話内容に対する正直さや自信を重んじるGriceの協調の原理に反するように見えるがこの用法は、過去形が過去の内容についてのみ真であり、現在の状況に中立であることから派生しており、時制ではなくモダリティーを表している。時制は観念的メタ機能の領域であり、モダリティーは対人的メタ機能の領域である。いわば言語形式が別の意味を表すため、体系機能文法においては文法的比喩の一つとして扱うことができたとした。

#### 木田 綾子

##### 増殖するおしゃべり—粹物語として読むカフカの『城』

木田綾子\*

\*新居浜工業高等専門学校一般教養科

ドイツ文学論集、第52号、pp27-43、(2019.10)

フランツ・カフカの長編『城』では、さまざまな人物がいずれも、村を訪れた主人公Kを前にして長い話をする。登場人物が何らかの話をすることによって、長編の中に一つ、あるいはいくつかの話が組み込まれる文学形式は、一般的に粹物語と呼ばれる。先行研究では、19世紀は新しい語りの形式や技法の実験にその特徴があり、粹物語もそうした実験とともに発展したものの、様々な表現が可能となった20世紀においては、粹物語形式はその役目を終え、次第に下火となってきたと見なされてきた。しかし、カフカの『城』を見る限り、「多層の語り」を持つこの形式は決して廃れたわけではなく、進化しながら継承されて

いるように思われる。伝統的な杵物語にはいくつかの共通した状況設定があり、『城』にはそうした設定を彷彿とさせる箇所がいくつも見られるからである。ただ『城』においては、設定は伝統からことごとく逸脱している。作品をそのように杵物語として読むと、伝統から逸脱した設定と、この長編が未完であることの必然性とは、少なからず関連のあることが指摘できる。加えて、カフカが長編を執筆する際の独特の手法が、この形式と合致していたことも検証した。

### 濱井 潤也

宗教「理解」と宗教「経験」—世俗化された国家において共有されるべき「中立」の基準

“Understanding” and “experience” of religion – “neutral” criteria in secular modern nations

濱井潤也\*

\*新居浜工業高等専門学校一般教養科

広島大学応用倫理学プロジェクト研究センター、『ぷらくしす』 第30号、pp27-36、(2019.3)

チャールズ・テイラーのコミュニタリアニズム（共同体主義）思想においては、しばしば現代国家の「政教分離」の原則に反して、政府が特定の宗教教義、組織、伝統に対して他の同様のものとは異なる特別な扱いを公的に認めることを推奨する場面が見られる。公共の場における宗教的シンボルの着用を禁じるフランス型の政教分離原則（ライシテ：laïcité）批判にはじまり、彼の議論は自身の故郷であるカナダのケベック州政府に対しては、伝統的なカトリック文化を守り維持する権利を認め、タイ王国の民主化に対しては、伝統的なタイ仏教理解とそれに基づく王政の延長線上に民主主義を位置づける。

こうした一見反「政教分離」的な立場をテイラーが擁護する政治哲学的な理由は大体以下の二点に絞られる。第一に我々日本人が宗教とは無関係に普段着ている洋服ですら、西洋のキリスト教文化圏に由来するように、宗教的「中立」をあらゆる宗教の影響を排している状態だと規定するなら、そもそも「中立」な文化というものがありえないということである。それゆえに第二に我々個々人は国家社会に先んじて存在するのではなく、その中に生まれてくる存在であるがゆえに、多かれ少なかれ伝統的な宗教の影響下にあるようなアイデンティティを共同体から吸収せざるを得ないというコミュニタリアニズムの基本的な主張である。したがっていずれにせよテイラーが反「政教分離」的な立場を肯定するのは、それがよいのだ、というのではなく止むを得ない、仕方がないといういわば消極的肯定にすぎないのではないかと考えられる。

こうした疑念を探求するために、本稿では彼が共同体において、すなわち世俗化された現代の国家社会において、宗教をどのように位置づけているのかを彼のいくつかの宗教論とそれをめぐる論争から掘り下げてい。その上でテイラーの思想が、共同体の特殊性の擁護のために「中立」を破棄して反「政教分離」を採るのではなく、「中立」や「政教分離」を重視したうえで、一見反「政教分離」的に見える特定の宗教への公的な特別扱いを容認しようという道を選択していることを、いかにしてそれが可能なのかという点とも併せて明らかにする。

## 〔区 分 B〕

### 佐伯 徳哉

【単著】『権門体制下の出雲と荘園支配』（同成社中世史選書 27）

佐伯徳哉\*

\*新居浜工業高等専門学校一般教養科

同成社、pp263、(2019. 10)

平安時代末期から鎌倉時代の出雲国の地域における荘園支配体制の形成と、その構図をみながら、地域から権門体制を構成する諸権門以下諸領主層の政治的実力基盤の形成の在り方について明らかにした。そして、この荘園支配体制下における地域開発のあり方から出雲地域各地における地理的環境に根差した生産基盤の形成・発展をみていきながら、それが地域支配体制の変革をどのように規定していったのかを明らかにした。

### **野田 善弘**

#### **理系のための中国語入門【第2刷】**

杉山明\*1、畑村学\*2、野田善弘\*3、泊功\*4、橋本剛\*5、張婷婷\*6、張潔\*6

\*1 津山工業高等専門学校総合理工学科、\*2 宇部工業高等専門学校一般科目、\*3 新居浜工業高等専門学校一般教養科、\*4 函館工業高等専門学校一般科目、\*5 松江工業高等専門学校情報工学科、\*6 大連東軟信息学院  
好文出版、(2019. 4)

2017年に刊行した『理系のための中国語入門』（中国地区高専中国語中国教育研究会）の不備や不足を補い、第2刷を発行した。

本教科書は、中国語圏で高専生が活躍する際に役立つ内容を盛り込んだ特殊な教科書で、すでに多くの高専で使用されている。しかし、初版は、誤植等も多くあり、改訂が望まれていた。今回、機会を得て初版の誤植などを訂正し、かつ若干の説明も書き加えて、初版と比べて使いやすい教科書を作成することができた。なお、本教科書は、日本学術振興会・科学研究費補助金のうち基盤研究（C・一般）「理系学生用オリジナル中国語教科書に即したアクティブラーニングの開発及び事例集作成」（課題番号：18K00818 研究代表者：畑村学）の助成による研究成果の一部である。

### **木田 綾子**

#### **書評：野村優子 著「日本の近代美術とドイツ — 『スバル』『白樺』『月映』をめぐって」**

木田綾子\*

\*新居浜工業高等専門学校一般教養科

西日本ドイツ文学、第31号、pp45-49、(2019. 11)

高村光太郎は、1910年4月の雑誌『スバル』に寄稿した「緑の太陽」と題する美術批評文の中で、PERSONLICHKEIT や GEMUETSSTIMMUNG といったドイツ語を、日本語の中にそのまま用いて論じている。高村光太郎はアメリカやフランスに留学しており、特にドイツ語に明るかったというわけではない。それがなぜ、美術批評においてドイツ語を多用したのか。本書はこの疑問を出発点とし、日本近代美術におけるドイツ受容を問うている。

近代日本における西洋美術受容といえば、フランスが主流であろう。黒田清輝をはじめとする日本の画家の多くがフランスで学び実践を積んだ。一方画家としての実践ではなく、画家の描いた作品を批評する者、すなわち、「美術を言葉で支える思想面」を担う者は、語学に秀でた文学者だった。美術を批評する上で、実際に制作しない彼ら批評家の言葉に説得力を持たせるには、海外の批評を引用する必要があったからである。美術批評は文芸雑誌において行われた。明治末期の知識人たちの多くはドイツ語に精通しており、そのため、ドイツ語の書物や雑誌が好んで読まれ、ドイツの美術批評家の論が取り入れられることとなった。このような背景のもと本書は、ドイツ美術受容にかかわりの深い三つの雑誌が、第一章『スバル』、第三章『白樺』、第四章『月映』の各章で取り上げられている。また、『白樺』との関連性が高いドイツの美術批評家については、第二章で考察されている。

高村光太郎の批評文からほぼ一世紀を経た現在、「不慣れなドイツ語」に対する疑問点から出発した本研究は、今後、ドイツ美術受容の研究史の発展に貢献するだろう。

濱井 潤也

“Person und Identität. Charles Tazlors Theorie der Person und ihre Anwendungsmöglichkeit(en)“, in *Der Begriff der Person in szstematischer wie historischer Perspektive Ein deutsch-japanischer Dialog*

Michael Quante\*1, Hiroshi Goto\*2, Junya Hamai\*3 etc.

\*1 Philosophisches Seminar an der Westfälische Wilhelms-Universität Münster, \*2 Philosophische Fakultät an der Hiroshima Universität, \*3 Geisteswissenschaft an der Niihama Fachhochshule in Niihama Mentis Verlag, (2020)

Die Nachricht, dass England den Austritt aus der EU gewählt hat, hat einen Stoß bis ans Ende der Welt gegeben. Herr Johnson ist ehemaliger Bürgermeister von London und Führer der Partei der Austritts. Er hat von Steuerhöhungen und einer Zunahme der Arbeitslosigkeit, von der Verschlechterung der öffentlichen Sicherheit und dem Verlust der alten Kultur Englands als Übelstand der EU-Zugehörigkeit gesprochen. Was jedoch der Hintergrund dieser Probleme ist, können wir uns leicht denken. Da ist das Problem der Emigration oder der Flüchtlinge. Die EU hat bisher den „Multikulturalismus“ repariert und geschützt. Aber ich denke, der „Multikulturalismus“ ist von dem globalen Problem der Flüchtlinge aus Syrien seit dem Sommer 2015 besiegt worden. Die EU oder der „Multikulturalismus“ sind für Japaner das Ergebnis des philosophischen Gedankens der Aufklärung. Wir denken, dieser bedeutet Freiheit, Menschenrechte, Gleichheit ohne Unterschiede, und wir haben den Gedanken zu lernen. Aber das Wirrwarr der Gemeinschaft Europas und der schwierigen Wirklichkeit sowie der Probleme der Flüchtlinge rät uns zu bedachtsamem Lernen. Das ist das wichtigste Problem der Japaner: Wie verstehen wir den Aufklärungsgedanken im modernen Europa, und wie führen wir den Gedanken aus oder nicht aus, denn das Problem der Emigration oder der Flüchtlinge sind nicht beziehungslos für uns.

Ich kann nicht von den Problemen der Flüchtlinge aus Syrien sofort einen gültigen Rat geben, die im Augenblick als große Flutwelle betrachtet werden. Aber ich möchte als Hinweis von der Struktur von Charles Taylors „Kommunitarismus“ sprechen. Der „Kommunitarismus“ ist das Ideal des „Multikulturalismus“ auszuführen, dass wir mit Menschen einer anderen Kultur zusammenleben. Der Philosoph Charles Taylor erforscht Hegels Philosophie in Kanada. Er ist jedoch nicht nur Philosoph, sondern auch als politisch aktiver Mensch bekannt, weil er an der politischen Tätigkeit positiv teilgenommen hat. Das größte Problem ist das der Emigration in seiner Heimat Quebec in Kanada. Ich werde später im Detail darauf eingehen. Im Jahr 2008 hat Taylor ein Referat herausgegeben [das sogenannte „Bouchard-Taylor-Referat“]. In dem Jahr haben wir die gleiche Struktur in Quebec und der Föderation Kanada, die wir 2016 in England und der EU sehen können. Viele Menschen in Quebec haben den Austritt aus der Föderation Kanada gewollt, so wie England 2016 aus der EU ausgetreten ist. Aber in dem Referat legt Taylor Einspruch gegen die Unabhängigkeit Quebecs von der Föderation Kanada ein. Und er stellt eine neue Behauptung auf, den Gedanken des „Interkulturalismus“, statt des „Multikulturalismus“. In dem neuen Gedanken finden wir die wichtige Andeutung, wie wir den bisherigen „Multikulturalismus“ verbessern können, wenn wir über die Methode des Zusammenlebens mit Menschen einer anderen Kultur nachdenken. Das Problem ist unvermeidlich, wo auch immer wir sind.

Aber wir können den Gedanken Taylors nicht verstehen, wenn wir nur dessen praktischen Teil - wie lösen wir das Problem der Emigration oder der Flüchtlinge - ins Auge fassen, weil er das praktische Problem nicht vom Gesichtspunkt der ökonomischen Rationalität und Nützlichkeit aus betrachtet, sondern nach dem Ursprung des Guten fragt: „Was ist ein gutes Leben für mich und

warum? “ Und die Frage in Taylors „Kommunitarismus “ lautet „Was ist das Ich? “, meine sogenannte Identität. Taylors Philosophie beginnt mit der Frage „Was ist das Ich? “ und kehrt immer zu der Frage zurück. Das ist die dialektische Struktur. Daher möchte ich in der Abhandlung den Begriff der Person in dem Ursprung des Gedanken Taylors durch eine Analyse der Struktur seines „Kommunitarismus” darstellen. Dabei möchte ich den Fokus auf das „Ich “ richten, die sogenannte Person des Menschen als das Subjekt, wobei jeder „Ich “ sein kann. Danach möchte ich die Gemeinsamkeiten und Besonderheiten durch den Vergleich mit dem Begriff der Person in Hegels Philosophie als Grund von Taylors Philosophie aufzeigen. Und ich möchte außerdem vom Gesichtspunkt der Auffassung von der Person die Möglichkeit der Anwendung des praktischen Problems, d. h. „das Zusammenleben mit Menschen einer anderen Kultur “, betrachten.

### 沼田 真里

#### 新編現代女性文学全集 11巻

岡野幸恵\*1、沼田真里\*2、

\*1 法政大学文学部日本文学科、\*2 新居浜工業高等専門学校一般教養科

立花出版、(2019. 12)

近現代日本における女性文学の系譜をたどる現代女性文学全集。92人の女性作家を収録し、全12巻。監修は、岩淵宏子+長谷川啓。11巻は、加藤幸子、米谷ふみ子、森瑤子、干刈あがた、津島佑子、増田みず子、高樹のぶ子、中沢けい、李良枝の小説作品が収録された全集。増田みず子と中沢けいの解題・解説(作家・作品紹介)を執筆。

### 沼田 真里

#### 法政大学通信教育部 特講現代 テキスト

田中和生\*1、沼田真里\*2、

\*1 法政大学文学部日本文学科、\*2 新居浜工業高等専門学校一般教養科

法政大学、(2020. 1)

本書は、法政大学通信教育部で開講されている授業「特講現代」のために、新しく作成された教科書である。本書の企画段階から関わり、作家作品の選定などにも携わった、まず概説で、日本の現代文学の定義を問う評論があり、以降は太宰治『お伽草紙』、埴谷雄高『死霊』、大岡昇平『野火』、安岡章太郎「海辺の光景」、田村隆一『四千の日と夜』、大庭みな子「三匹の蟹」、江藤淳『夏目漱石』、後藤明生『挟み撃ち』、大江健三郎『万延元年のフットボール』、柄谷行人『日本近代文学の起源』、津島佑子『山を走る女』、中上健次『千年の愉楽』、村上春樹『ねじまき鳥クロニクル』、山田詠美『風味絶佳』、俵万智『サラダ記念日』、吉田修一『悪人』と、全16名ほどの日本現代文学作家をとりあげ、各作家の解説を複数の執筆者が担当。その中で、大庭みな子『三匹の蟹』の解説と、津島佑子『山を走る女』の解説を担当。

### 沼田 真里

#### 新編現代女性文学全集 12巻

矢澤美佐紀\*1、沼田真里\*2、

\*1 法政大学文学部日本文学科、\*2 新居浜工業高等専門学校一般教養科

立花出版、(2020. 3)

近現代日本における女性文学の系譜をたどる現代女性文学全集。92人の女性作家を収録し、全12巻。監修は、岩淵宏子+長谷川啓。11巻は、山田詠美、荻野アンナ、松本侑子、小川洋子、村田喜代子、多和田葉子、川上弘美、鷺沢萌、角田光代、江國香織、桐野夏生の小説作品が収録された全集。荻野アンナと鷺沢萌の解題・解説(作家・作品紹介)・年譜を執筆。

## [区 分 C]

### 木田 綾子

#### ドイツ文学におけるクリスマス

木田綾子\*

\*新居浜工業高等専門学校一般教養科

新居浜工業高等専門学校紀要第 56 巻、pp35-40、(2020. 1)

ドイツ文学には、クリスマスの場面が印象的に描かれることが少なくない。クリスマスという時期が主要なテーマとして扱われることもあれば、長い作品の一場面として扱われることもある。クリスマスの描かれ方は作品によってそれぞれに異なり、時代によって微妙な変化も見受けられるが、そこには共通して、幼少期の幸せな記憶や郷愁が現れている。ドイツを代表する作家ゲーテは、クリスマスの場面を文学の中にいち早く取り入れた。1774 年に発表された『若きヴェルターへの悩み』には、当時ドイツ特有の風習であったクリスマスツリーの様子が印象的に描かれている。ここには、その後の 19 世紀の文学に描かれるクリスマスの場面を方向付ける原型のようなものがある。クリスマスツリーを飾るなど、ドイツから広まった風習が、文学においても重要な役割を果たしていることを明らかにした。

### 塚本 亜美

#### 書評：日・英語談話スタイルの対照研究：

#### 英語コミュニケーション教育への応用（津田早苗他 2015）

塚本亜美\*

\*新居浜工業高等専門学校一般教養科

新居浜工業高等専門学校紀要 第 56 巻、pp69-76、(2020. 1)

これは言語学および談話分析について書かれた学術書の書評である。「日・英語談話スタイルの対照研究：英語コミュニケーション教育への応用」は、大学英語教育学会(JACET)の中部支部待遇表現研究会に所属する研究者のグループが受けた平成 22～24 年度科学研究費助成事業の成果をまとめたものである(「国際語としての英語の語用指標解明と英語教育への応用—英語会話ができる日本人の育成」研究代表者：津田早苗)。日本人は英会話が苦手だとしばしば言われているが、その理由として英語会話と日本語会話のコミュニケーション・スタイルの違いが挙げられる。「自己開示」「質問・応答」「相づち」「他者修復」「ターン」「話題展開」という 6 つの言語学的観点から会話データを分析することで、著者らは両言語における「暗黙の決まりごと」と浮き彫りにしようと試みた。さらにその分析結果を英語教育にも活用しようとしている。評者自身も英語教育に携わるものとして、この談話分析の結果を英会話指導に活用することができれば幸いである。

### 平田 隆一郎

#### PF interface approach to P-stranding generalizations in Welsh

平田隆一郎\*

\*新居浜工業高等専門学校一般教養科

Phonological Externalization volume 4, pp23-36, (2019. 4)

This article discusses preposition stranding (P-stranding) and related phenomena in Welsh. P-stranding is not allowed in prescriptive grammar, however, it is observed colloquially nowadays

(Borsley et al. 2007). I will examine the relation between the availability of P-stranding and its generalizations proposed in Abels (2003). This work aims to give an account on Welsh data at PF interface where syntax and phonology interact.

### 濱井 潤也

#### 政治への無関心を主権者教育で解消しようという試みの矛盾—コリン・ヘイの社会構築主義的アプローチにおける現代政治概念の変遷から—

濱井潤也\*

\*新居浜工業高等専門学校一般教養科

新居浜工業高等専門学校、『新居浜工業高等専門学校紀要』、第56巻、pp1-10、(2020.1)

2019年7月の参院選が終わったが、10代の投票率は、10代が初めて選挙権を行使することになった2016年の参院選よりも早速下がってしまったようだ。今回の全体の投票率が48.8%なのに対して、10代の投票率は31.33%に留まっている。初回の記念的意味合いから高い投票率が見込まれた前回と異なり、10代の選挙に対する関心は実際のところこんなものなのだろうと思わせる。

若年層の政治への無関心を克服するある種の切り札として導入された18歳、19歳への選挙権の付与と同時に、日本の学校教育も当然、新たな時代の社会科における主権者教育の補強に乗り出してきている。2015年には高等学校において副教材『私たちが拓く日本の未来』を活用した模擬選挙、模擬議会等の実践的活動の強化が推進され、周知のように次期学習指導要領の改訂には主権者教育を柱とする「公共」の設立が盛り込まれている。

これらの懸命な策の数々が目指す若者の積極的な政治参加が実現されているか否かは、とどのつまり投票率の上下を基準として測られるのであり、投票率の低下は依然としてこれらの主権者教育がまだ効果を発揮していない、あるいは失敗していることを示す。しかしここには一つの論理的飛躍がある。現在行われている主権者教育の中身の検証なしには、その成功が必然的に投票率の上昇に繋がるかどうかはわからない。むしろ現在の主権者教育が成功し効果を発揮した結果が投票率の低迷だという可能性はないだろうか。

思想・信条の自由を中核として他者の意見の尊重と価値の多様性を尊び、また政治家の言説の裏にある様々な欺瞞を見抜く批判的な政治的リテラシーを涵養することを学んだ若者たちは、政治に対していかなる最適解を導くのだろうか。当然、今なお堅持されている日本の教育における政治的中立性は、「投票に行け」とは言うが「誰・どの党に」という疑問に対しては一斉に口をつぐみ、架空の党の架空の候補者を題材にした模擬投票によって「箱に紙を入れるのだ」という無意味な投票の仕方にフォーカスし続けさせるのである。「わからない」という若者の言葉は彼らの無知や身勝手さではなく、むしろ我々が彼らに求めた熟慮と謙虚さの現れではないだろうか。

本稿では、現代の政治への無関心の背景構造を明らかにして脚光を浴びたイギリスの政治思想家コリン・ヘイの『政治は何故嫌われるのか(原題: "Why we hate politics")』における議論を概観する。その上で公共選択論や新自由主義の台頭によって発生した政治への負のイメージを、政治家も有権者も互いに循環させながら増幅させてきたのだというヘイの論点を援用し、若者の政治への無関心の片棒を担いできた主権者教育の責任の一端を明らかにする。

### 沼田 真里

#### 正岡子規の時間意識——〈美〉と死生観の構造

沼田真里\*

\*新居浜工業高等専門学校一般教養科

新居浜工業高等専門学校紀要 第56巻、pp59-68、(2020.1)

本論では、『松羅玉液』『墨汁一滴』を中心に、子規の〈時間〉意識に着目した。〈時間/空間〉は、〈客

観／主観）同様に、子規の俳句理論で重要な要素である。そして、この〈時間／空間〉理論が生まれた背景には、健常者以上に〈時間〉〈空間〉が制約される、病者特有の身体性があった。俳句、短歌に限らず、子規の随筆でも、はからずも〈時間〉〈空間〉の要素が、作品のダイナミズムを発生させる手法として活用されている。随筆で語られる子規独特の〈時間意識〉は、病者特有の時間意識とも言い換えられる。子規の俳論の主要素〈時間／空間〉は、俳句理論を追求した結果だけではなく子規自身の病者としての身体性の必然から生まれ、探求された方法であった点を、本論では具体的に論証した。また、子規の〈時間〉意識を分析することで、子規が創作を進める過程で、人生の再検討へと思索が深まる過程を分析し、さらに短歌連作では、時間が効果的に用いられ、〈死〉や〈喪失〉が〈美〉として昇華されるという〈美〉の方法について指摘した。自己の心身の変化を題材に、〈人生〉を考察し再検討しながら進化していく文体や歌自体に、彼の美学と死生観が表出されている。近年進んでいるナラティブ研究も参考に、子規の文学と死生観への新たな評価につなげた。

## 〔区 分 E〕

### 野田 善弘

#### Active Learning in Cooperation with NUU Student Teachers

野田善弘\*

\*新居浜工業高等専門学校一般教養科

The 3rd NIT-NUU Bilateral Academic Conference 2019, (2019.9)

第3回を迎える台湾国立聯合大学と高専による合同カンファレンス（於台湾・苗栗）において、発表者は中国語の授業実践に関する報告を行った。

新居浜高専では2016年から国立聯合大学の学生を中国語教育実習生として受け入れ、初級中国語や国際理解の授業で教育実習を行っている。これによって、新居浜高専の学生は、ネイティブによる授業という貴重な体験を得るとともに、同世代外国人との交流を楽しむ機会が提供されている。

発表者はこのような取組の成果をまとめ、Linguistics and Language Education のセッションにおいて、国立聯合大学の実習生とともに実施したアクティブラーニング型授業の実践報告を行った。なお、本発表は、日本学術振興会・科学研究費補助金のうち基盤研究（C・一般）「理系学生用オリジナル中国語教科書に即したアクティブラーニングの開発及び事例集作成」（課題番号：18K00818 研究代表者：畑村学）の助成による研究成果の一部である。

### 野田 善弘

#### 闘う篤山～林良斎・近藤篤山往復書簡を読む～

野田善弘\*

\*新居浜工業高等専門学校一般教養科

暁雨館大学講座、(2019.11)

愛媛県四国中央市土居町にある暁雨館は、地域の先人の顕彰を行っている施設である。暁雨館では、毎年「暁雨館大学講座」と題して公開講座を開催していて、発表者に対して土居町出身の幕末の朱子学者、近藤篤山に関する講演依頼があった。

講演内容は、発表者の専門分野である中国近世思想史の中で、近藤篤山の思想がどのような位置に立つのか、その思想の特色について、香川多度津出身の陽明学者林良斎との往復書簡による論争を読み解きながら明らかにするもので、あわせて中国近世思想史の大きな二つの潮流、朱子学と陽明学 of 思想構



造の相違などを解説した。

発表者の中国思想史に関する専門知識が、郷土の先賢を理解する一助となったのであれば、実に喜ばしいことである。

### 木田 綾子

#### ドイツ文学とクリスマス

木田綾子\*

\*新居浜工業高等専門学校一般教養科

第 49 回高専ドイツ語教育研究発表会、(2019. 6)

ゲーテは、学生時代に目にしたクリスマスツリーを、きらきらとした明るいもの、幸福な幼少期を象徴するものとして『若きヴェルターの悩み』に取り込んだ。「子供とクリスマス」の明るい様子が描かれることにより、既に死を決意しているヴェルターの絶望との対比が強調される。作品におけるそのような効果は、19 世紀以降の作家、ホフマンやシュティフター、シュトルム、トーマス・マンらに引き継がれる。彼らはクリスマスを描くことによって、その後の不幸を強調したり、明るいクリスマスの背景に潜む社会問題を浮き彫りにしたりした。ろうそくを灯したクリスマスツリーや香辛料の効いたお菓子や贈り物など、クリスマスの光景は明るくきらびやかである。そこには幸福な子供たちのイメージが伴う。それゆえ、文学にクリスマスを描くことは、これと対象をなす暗部を浮き立たせるための仕掛けでもあったのである。

### 木田 綾子

#### ドイツにおけるクリスマスの文化

木田綾子\*

\*新居浜工業高等専門学校一般教養科

2019 年 愛媛日独協会公開講演会、(2019. 7)

ドイツでは、アドベントカレンダーやアドベントクランツなど、クリスマスまでに行う様々な風習がある。クリスマスマーケットでは焼き菓子やオーナメントが並ぶ。ミュンヘン留学の体験を交えながら、この時期の街の雰囲気伝えると同時に、クリスマスに関連した物語や詩など、様々な文化について紹介した。

### 木田 綾子

#### 『若きヴェルターの悩み』における自然

木田綾子\*

\*新居浜工業高等専門学校一般教養科

論集「ドイツ文学と/における自然 (仮)」第 1 回研究会、(2019. 8)

ヴェルターの心が目にする風景に反応し、彼の内にあるものと外にあるものとが照応するとき、ひとつの逆転現象が生ずる。すなわち、ヴェルターの内なる自然が明るく陽気であれば、外なる自然も同様に明るく描かれるのである。つまり、外なる自然は、ヴェルターの内なる自然の現れに他ならない。5 月 10 日の手紙において、自然は賛美される。しかし、周囲の自然は、やがて自然のもう一つの側面である破壊的な姿をとってヴェルターの前に立ち現れる。ヴェルターの知覚の仕方が変化したのは、ロッテの婚約者であるアルベルトが旅先から帰ったことに因る。ロッテの存在がヴェルターの内面に対してポジティブに作用したのとは反対に、アルベルトの存在は、ヴェルターの内面に対してネガティブに作用する。ヴェルターが目にする外なる自然は、明るく美しい風景として彼の目に映ったときと変わらないはずだが、ヴェルターの内なる自然の変化とともに、「移ろう」ものとして彼の目に映る。8 月 18 日の手紙では、そうした破壊的な自然の様子が描かれている。

## 木田 綾子

### 杵物語として読む『城』

木田綾子\*

\*新居浜工業高等専門学校一般教養科

カフカ研究会「2019年夏季研究集会」、(2019.9)

話を語るというのは、もっとも素朴な文学形態の一つである。小さな話を集めて、登場人物が語るという設定で、一つの大きな話の中に含めていったのが杵物語である。19世紀までの作品はあくまで読者を主体とした娯楽の要素が強かった。杵物語もそうした伝統を受け継ぎながら、物語る行為の様々な効能への期待が垣間見られた。そこには何らかの伝える内容があり、物語の聞き手や作品の読者を楽しませるための工夫として小さな話が盛り込まれる。しかしながら、『城』においては、皆が都合のいいように自分に見えたことを物語る。聞き手を楽しませるために語られる伝統的な設定を思い起こさせながらも、これを裏切り、自らのために語る人々は、自らのために書く行為を続けた作者の投影という見方もできよう。しかしながら、作品全体が示しているのは、作者の抱える個人的な問題には留まらない。そこには、人が語る話の歪さ、記憶に残る形象の奇怪さが、人間の有り様の一つとして提示されている。

『城』に描かれた多層の語りは、その有り様を表現した結果であり、そのため各人の記憶の確かさや作品の整合性は問題にはならない。

作品は完結しないまま、いくつもの長い会話がつながられる。小説という文学形式が進化するのと並行して、読者もまた、気晴らしとは異なる要素が作品内に存在すると気づく。作品に描かれることのないおしゃべりの続きは、読者個人に委ねられる。自らのために語られるおしゃべりの連鎖によって形成されるカフカの『城』は、20世紀における杵物語の一つの形を作った。

## 濱井 潤也

### 宗教「理解」と宗教「経験」—世俗化された国家において共有されるべき「中立」の基準

濱井潤也\*

\*新居浜工業高等専門学校一般教養科

第27回広島大学応用倫理学プロジェクト研究センター例会、(2020.2)

チャールズ・テイラーのコミュニタリアニズム（共同体主義）思想においては、しばしば現代国家の「政教分離」の原則に反して、政府が特定の宗教教義、組織、伝統に対して他の同様のものとは異なる特別な扱いを公的に認めることを推奨する場面が見られる。公共の場における宗教的シンボルの着用を禁じるフランス型の政教分離原則（ライシテ：laïcité）批判にはじまり、彼の議論は自身の故郷であるカナダのケベック州政府に対しては、伝統的なカトリック文化を守り維持する権利を認め、タイ王国の民主化に対しては、伝統的なタイ仏教理解とそれに基づく王政の延長線上に民主主義を位置づける。

こうした一見反「政教分離」的な立場をテイラーが擁護する政治哲学的な理由は大体以下の二点に絞られる。第一に我々日本人が宗教とは無関係に普段着ている洋服ですら、西洋のキリスト教文化圏に由来するように、宗教的「中立」をあらゆる宗教の影響を排している状態だと規定するなら、そもそも「中立」な文化というものがありえないということである。それゆえに第二に我々個人は国家社会に先んじて存在するのではなく、その中に生まれてくる存在であるがゆえに、多かれ少なかれ伝統的な宗教の影響下にあるようなアイデンティティを共同体から吸収せざるを得ないというコミュニタリアニズムの基本的な主張である。したがっていずれにせよテイラーが反「政教分離」的な立場を肯定するのは、それがよいのだ、というのではなく止むを得ない、仕方がないといういわば消極的肯定にすぎないのではないかと考えられる。

こうした疑念を探求するために、本稿では彼が共同体において、すなわち世俗化された現代の国家社会において、宗教をどのように位置づけているのかを彼のいくつかの宗教論とそれをめぐる論争から掘り下げたい。その上でテイラーの思想が、共同体の特殊性の擁護のために「中立」を破棄して反「政教

分離」を採るのではなく、「中立」や「政教分離」を重視したうえで、一見反「政教分離」的に見える特定の宗教への公的な特別扱いを容認しようという道を選択していることを、いかにしてそれが可能なのかという点とも併せて明らかにする。

### 沼田 真里

#### 「正岡子規の病と死生観と〈美〉」

沼田真里\*

\*新居浜工業高等専門学校一般教養科

愛媛県生涯学習センター主催、東予コミュニティ・カレッジ「愛媛の文学・歴史講座」、(2019.11)

本講演は、愛媛県にゆかりの深い正岡子規とその作品の解釈や理解に関して紹介した。一般市民の方にも興味を持ちやすいように、東京都や愛媛県に残る正岡子規の史跡を、スライドを使って紹介し、クイズ形式も取り入れた。その後、正岡子規の死生観と、俳句理論を、実際の子規の作品鑑賞しながら解説した。正岡子規といえば愛媛で一番有名な作家なのだが、案外地元の人も知らないことが多かったとの感想もあり、有意義な時間となった。